ベットブルク狼男事件の衝撃
――宗教改革期における想像力と社会

高津　秀之

はじめに

1589年10月31日、ライン河下流域にある大都市ケルン近郊の小都市ベットブルク（Bedburg）で、シュトゥーペ・ペーター（あるいはシュトゥムプ・ペーター）なる人物が処刑された。当時のケルン市民ヘルマン・ヴァインスベルク（1518－1597）は、彼の回想録にこの事件のあらましを記している。

「1589年10月31日、シュトゥーペ・ペーターが処刑された。彼はケルンからエルプラート方面に3マイルほどのところに住む農民である。彼は逮捕されて、ベットブルクに護送された。人々が語るには、彼は魔法使いであり、自らを人狼（werwolf）に変えて、この地に多くの損害と悪事を引き起こしたとのことである。この噂は、この夏中、滅多にないほどケルン内外の人々の間に広まり、語られた。これについては印刷物が出され、彼の自白の内容が最近明らかにされたが、それによれば、彼は25年間魔女と淫行したのみか、彼の実の娘と寝た。彼はベルトを所有しており、これを身につけると、彼は人狼に変身するのである。こうしている間も、彼は人間としての理性を保っており、ベルトを外すと再び人間の姿に戻ることができた。そして彼は、狼の姿で、自分の実の息子を含む6歳から7歳の子供たちを

13人殺し、その頭から脳みそをすすった。また、2人の男性と1人の女性の命を奪い、多くの家畜に損害を与えたという。伝えられるところでは、彼は10月31日に死亡した。最初に熱せられた鉄のやっとこで肉を引きちぎられ、次いで斧で腕と脚を砕かれ、首をはねられた。そして最後に彼の遺骸は彼の娘のシュトゥーペ・ベーレンと代母のトリンゲン・トルンペンとともに燃やされた。また、見せしめとして、木製の狼像をのせた車輪［を備えたさらし台］が据えつけられ、ペーターの首を刺した。」[1]

ヴァインスベルクは、同じ記述の中で、この事件と関連して、「私は、私が見聞きしたことを信じるべきであろう。このことは全く確かであるが、私は人々が魔法について話し、夢を見て、無批判に繰り返しているような事柄の全てを信じることができない」と述べている[2]。しかし、ベットブルクの狼男ペーターはヨーロッパ中の注目を集め、長い間人々の記憶に留まった。裁判の直後、この事件のあらましを伝える挿絵つきビラがニュルンベルクで印刷、出版されたが、このビラが飛ぶように売れたことは、それがアウクスブルクなどのニュルンベルク以外の都市においても、何度も版を重ねたことからも明らかである。ヴァインスベルクも、このビラを参照して先の記述を記したと考えられる。また、1612年にロンドンで出版されたサミュエル・ロウランズの『ハートのジャック』（“Knave of Hearts”）という著作には、ベットブルクの狼男事件の詳細が伝えられており、事件から20年以上経った後も、この事件が人々の記憶に留まっていたことを物語る[3]。さらに時代をくだって現代、1959年にロンドンで刊行され、2009年には日本語訳も出版されたロッセリ・ホープ・ロビンズ著『悪魔学大全』には、多くの「凡庸な」狼男たちが「狼憑き」という項目の中で扱われる中、彼や数名の著名な狼男たちについては、彼らを個別に扱った項目が特別に設けられており、「ペーター・スタップ」、すなわ

【図 1】

ちシュトゥーペ・ペーターが今もヨーロッパを代表する狼男の１人と見なされていることをうかがわせる[(4)]。

すでに述べたように、狼男ペーターの事件のあらましは、1589 年に出版されたビラによって報じられた。このビラに付された挿絵（【図 1】）には、事件の１場面ではなく、左奥から中央手前、そして右奥へと、時間の流れに沿って複数の場面が描かれ、この事件の全貌が伝えられている。

すなわち、左奥には人間から狼に変身するペーター、子供を襲う狼の姿が描かれている。狼の腰のあたりが白く光っているが、これは魔法のベルトであろう。手前には狼男に対する残酷な処刑の様子が描かれている。これは「車裂き」と呼ばれる、中近世ヨーロッパに普及していた処刑の方法である。巨大な車輪に縛られたペーターが、ヴァインスベルクの記したような責め苦を受けている。最初の像は、処刑人が彼の肉をやっとこでつまんでいる。次の像では、ペーターに向かって男が斧を振りあげている。最後の像では、巨大な両手持ちの大剣によって、彼の首が切り落とされている。殺害されたペーターの遺骸は、奥に描かれた薪の山へと引きずられ、燃えさかる炎によって焼かれる。炎の中央には首のないペーターの遺骸、その両脇には娘のベーレンと代母トリンギンと思われる女性の姿が描かれ

ている。さらに木版画の中央には、木製の狼と車輪のついたさらし台があり、その先端にはペーターの首が突き刺さっている。また、その背景には馬に乗る役人と大勢のやじ馬たちの姿が描かれ、狼男に対する世間の関心の高さを示している。

人々は何故この狼男ペーターに大きな関心を示したのであろうか。中近世ヨーロッパの人々の想像の世界をうろついていた狼男のイメージは、どのように16世紀のドイツ、それもケルン近郊の小村に住む農夫のうえに投影されたのであろうか。

こうした問題を考察するうえで、この時代に作成された数多くの木版画ビラ、パンフレットの挿絵を検討することは有益であろう(5)。15世紀末にヨハネス・グーテンベルクによって活版印刷術が実用化されて以降、ビラやパンフレットが大量に出回った。こうしたビラやパンフレットの中には難解な神学的、政治的論争を伝えるものもあった。しかし、その大半は、購読者層の大半を占める民衆の関心を引くためのゴシップやスキャンダル、狼男ペーターの事件のような怪事件を報じている。ビラやパンフレットは、ちょうど我々にとってのスポーツ新聞やインターネットのWebサイトに掲載される怪しげなトップ記事のように、同時代人の想像力を刺激した。そして現代の歴史研究者に、彼らの幻想の世界の一端を垣間見せてくれるのである。

1．狼男のイメージ

宗教改革期のドイツを代表する画家であり、ルターとも親しい人物であったルーカス・クラナッハが作成した『狼憑き』という作品がある(【図2】)。四つん這いになり、髪をふり乱した男が、口に赤子をくわえている。狼憑きは、自身を野獣であると思い込み、実際にそのように振る舞うようになる精神錯乱者である。イングランドの医者ロバート・バートンは、1621年に出版された『憂鬱症の解剖学』の中で、狼憑きを精神病の

【図2】

一種として論じた。この議論は「狼憑きは病気であって変身ではない」とした、1584年のレジナルト・スコットの理解を受け継いだものである[6]。自らが狼に変身できると信じた狼男ペーターは、こうした狼憑きの1人と見なせよう。

しかし、スコットやバートン以外の多くの同時代人にとって、人間の動物への「変身」は、人智の及ばぬ超自然現象として、人々の不安と恐怖、そして密かな憧憬の対象であった。中でも狼男は、こうした自然の驚異を擬人化するイメージとして、毛むくじゃらの野人（Wildman）とともに、彼らの想像力の中核に置かれていた[7]。しかも彼らは、狼への変身を、キリスト教に敵対する悪魔のお得意の魔術と見なしていた。ピエール・ドゥ・ランクルは、17世紀のフランスで魔女狩りを推し進めた人物として悪名高いが、彼は1612年に「悪魔は他の動物よりもずっと好んで狼に変身する」と述べている[8]。そもそもヨーロッパにおいて狼は、数ある動物の中でも最も広く分布しており、同時に最も恐れられた、獰猛な動物であった。人々は、彼らが食料用に家畜を飼うようになって以来、家畜を襲う狼との「戦争」を続けていたのである[9]。したがって、狼男の伝承、人狼伝説は、古代ローマやゲルマンの神話伝承にその源をたどることのできるものを含めて数多い。そうした伝承は、日本語訳でその著書を読むことのできるセイバイン・ベアリング＝グールドをはじめとする民俗学者によって収集、編纂されている[10]。

他方、中近世ヨーロッパにおいて狼男は、犯罪者のような社会的脱落者、周縁民のイメージを負っていた。このことは、当時狼が、群れを作っ

て共同生活を行わず、文字通り「一匹狼」として活動する動物と見なされていたことと関係がある[11]。阿部謹也は、ドイツの民俗学者ヴィル＝エーリヒ・ポイケルトの収集した人狼譚を検討し、村や町の中で普段から仲間とうまく打ちとけない人間、どこか変わった所行のある人間など、人々の間で評判が良くない人間などに「あれは人間狼ではないか」という噂が流されていたことを述べている[12]。また、当時、呪術によって他人に危害を加える、死体を略奪するなどの宗教上の犯罪、あるいは統治権力に対する大逆罪、さらには夜間の放火や強姦などの不名誉な罪を犯し、共同体の平和を侵害した者は、平和喪失者として、いわば「村八分」の存在となったが、この平和喪失者は、しばしば「人狼」「狼男」と呼ばれた。例えば、阿部はフランク族の慣習法の集成である『サリカ法典』にある、以下のような規定を紹介している。

> 「彼が既に埋葬されたる死体を発掘奪取し、しかしてそれが彼について証拠立てられたる場合には、彼は彼がその親族と和解し、しかして彼ら（死体の親族）が彼のために人々の間に出ずることの彼に許さるべき旨、謂わんが日まで狼（wargus）たるべし。」[13]

精神錯乱、超自然現象あるいは魔法、犯罪者のような社会的脱落者…、これらは古代以来、中世、近世を経て近代、そして現代にまで至るヨーロッパの狼男のイメージである。こうしたイメージは、全て16世紀末にドイツの片隅で起きた事件の衝撃の原因として指摘できよう。しかし、ここで考察を停止してしまうならば、何故よりによって（それ以前でも以後でもなく）16世紀末のヨーロッパで、さらには（その他の時間や場所ではなく）1589年にケルン近郊の小集落に狼男が出現し、それが大きな関心を集めたのかという問題を理解することはできない。これまでの議論は全て、超時代的とも言える長期的な視点、そして全ヨーロッパを含む広域

的な視野に立っているからである。そこで次に、狼男について、16世紀のヨーロッパ、特にドイツの人々が抱いていたイメージを、当時の社会状況との関連において考察する。

2．16世紀のヨーロッパにおける狼男

2－1：狼男と放浪者

イタリア・ミラノのベルタレッリ印刷物収集館にある15世紀頃の木版画（【図3】）には、放浪者の姿をした狼が描かれている。すでに述べたように、中世以来社会的脱落者、犯罪者には狼男のイメージが付きまとった。しかし、この木版画は、ミラノのような先進的な都市ではすでに15世紀から、ヨーロッパのその他の地域においても16世紀以降には顕著となっていた社会的変化を背景として、狼男に対する人々の関心が特に高まっていたことを示している。

【図3】

その変化とは、貧困の増大と、人々の貧困観の変化である。ブラニスワフ・ゲレメクをはじめとする研究者によって既に明らかにされているように、およそ1520年代を転換期として、ヨーロッパ全域に渡って、かつてないほどの規模で貧困が蔓延した[14]。凶作や疫病、失業などを原因として生活手段を失った人々は、住み慣れた故郷を離れ、放浪者として各地を彷徨うことになる。彼らの多くは、経済的中心地であるケルンのような大都市に向かう。そこで仕事、あるいは少なくとも施しの食料にありつこうというのである。

それ以前の時代において、貧者に対する施しは、キリスト教の奨励する善行の1つであり、都市住民の魂の救済を実現する手段であった。特に商

業活動はキリスト教の隣人愛に反する悪行として非難されていたから、こうした活動に従事する富裕な商人たちは、多額の貧者への施し、さらには救貧施設の設立などを通じて、彼らの良心の呵責、死後の世界への恐怖を払拭しようとした。中世ヨーロッパにおいて貧困とは社会から一掃されるべきものではなく、貧民たちは社会において必要不可欠の存在であった。

しかし近世に入り、あまりにも多くの貧民が都市に流入し、住民たちの救済可能な範囲を超えてしまうと、仕事や食にありつけない者たちが犯罪者となり、都市の平和を危険にさらす可能性が高まった。この事態を避けるためにも、次第に都市当局は、貧民たちを取り締まり、市外に追放する対策を講じることを余儀なくされる。1510年頃に出版された『放浪者の書』は、「乞食や放浪者の使うもらいのあらゆる手口を物語って」いる書物である[15]。こうした書物には、人々の放浪者に対する強い警戒心が示されている。

このように放浪者は、16世紀のヨーロッパにおいて、人々のこれまでになく強い関心、警戒の対象となっていた。そしてここで重要なのは、彼らに狼男のイメージが付与されたことである。16世紀のヨーロッパの人々は、彼らの目の前を徘徊する放浪者の姿を見つめながら、同時に狼男という存在を心に描いていたことになる。

2－2：狼男と反聖職者主義

16世紀のヨーロッパにおいて、狼男のイメージと重ね合わされた社会的逸脱者は放浪者だけではない。近世ヨーロッパ最大の改革運動である宗教改革が、大勢の人々の支持を得て、それまでにない規模で推進された要因として、当時の社会に蔓延していた聖職者に対する反感、すなわち「反聖職者主義」（Anti-clerikalism）があった。宗教改革期の木版画ビラには、暴飲暴食や性的放埒にふける堕落した修道士の姿が繰り返し描かれ、人々の聖職者に対する反感を煽り立てた。そうした際、聖職者はしばしば

狼男として描かれた。このイメージ戦略は、キリストが行ったとされる「良い羊飼い」の説話を踏まえたものである。すなわち、新約聖書の『ヨハネによる福音書』第10章11節には、以下のようなキリストの言葉が記されている。

> 「私は良い羊飼いで、良い羊飼いは羊のために自分の命を捨てる。羊飼いでもなく、自分の羊をもたぬ雇い人は、狼が来るのを見ると羊を捨てて逃げ、羊は狼に奪われ散らされる。」(16)

この説話でキリストは、信者を正しく導く良い羊飼いとして自らを提示している。これに対して16世紀の堕落した聖職者は、説話の中で羊飼いと対比される狼、キリスト教徒に害をなす存在として描かれたのである。

例えば、1524年にアウクスブルクで出版されたパンフレット『狼の歌』の表紙（【図4】）

【図5】

この作品は、真ん中の使徒ペテロとパウロと思われる老人の像を挟んで、左右2つの異なる情景が描かれている。その左側の明るい世界では、木々や草の生い茂る丘のうえに真実の信仰を表象するキリストの磔刑像が立てられ、その周りには羊たち、すなわちキリスト教徒たちが集っている。これに対して、右側の荒涼たる岩場では、狼たちが迷える仔羊を求めて徘徊している。そしてビラの前景に描かれた2頭の狼のうち、獲物の仔羊を口にくわえた1頭の頭上には、三重冠が載っており、この狼がローマ教皇であることを示している。さらにもう1頭の狼はマントを身にまとい、つばの付いた枢機卿の帽子を被っている[18]。

もう1つ、修道士が狼男に変身してしまうという、面白い作品を紹介したい。出版地・出版年不明の『寡婦の家を喰らいつくす修道士と狼』の表紙には、現代の子供向けの絵本で用いられるような仕掛けが施されている(【図6】)。すなわち、そこでは頭巾を被った恐ろしげな様子の人物が、恐らくはタイトルにある「寡婦」と思われる女性とその子供と向かい合っているが、この人物の顔の部分は、そこだけ独立してめくることができるようになっている。そしてそれを1枚めくるとそこには剃髪した修道士の顔が現れ、それを

【図6】

さらにめくると獲物をくわえた狼の顔が現れる[19]。

このように、宗教改革期の反聖職者主義の高まりとともに人々の批判の対象とされた聖職者は、頻繁に狼男として描かれた。彼らは、放浪者と同様に、16世紀のヨーロッパにおいて、人々の強い批判の対象となっていた。彼らは堕落した聖職者たちの姿を注視していた。そして同時に、彼らの中に狼男という存在を発見していたのである。

2－3：宗教改革期における魔法と怪物

かつてマックス・ヴェーバーが「近代化」の出発点として位置付けた宗教改革の時代は、魔法と怪物の時代でもあった。当時の木版画ビラやパンフレットがこの問題に関する記事で埋め尽くされていた—狼男ペーターの記事はその1つである—ことからも理解できるように、魔法と怪物は、16世紀のヨーロッパの人々の想像をかき立てる、お気に入りのテーマであった。

ヨーロッパで魔女狩りの嵐が最も激しく吹き荒れた時期は、16世紀から17世紀であった。異端審問官ハインリヒ・クラーメルとヤーコプ・シュプランゲルの手による悪名高い『魔女の鉄槌』が出版されたのは、1486年である[20]。ここで魔女と魔法について詳細に論ずることはできないが、人を動物に変身させる術、いわゆる変身魔法は、箒や動物に乗って空を飛ぶ飛行魔法、あるいは意中の異性をふり向かせ、恋人同士を仲違いさせてしまう性愛魔法とともに魔女の用いる代表的な魔法とされていた[21]。そして魔女は、外出の際、子猫やネズミ、さらには狼に変身するものとされた。

この変身魔法の信憑性について、906年頃にプリュムの元大修道院長レギノが著した『司教法令集』には、以下のような反対意見が示されている。

「すべてをおつくりになり、すべてのものをお生みになった創造主

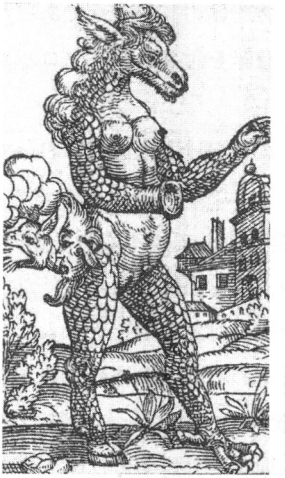
をのぞき、ある被造物がよりよいものや、より悪いものに変えられたり、ほかの姿や別の外見に変身させられることがありうるとつねに信じる者は、不信心者であって、異教徒よりも悪い。」[22]

この『司教法令集』は、その後もいくつかの教会法集成の中で繰り返し取り上げられた後、1140年頃グラティアヌスの教令集に取り入れられ、中世の教会の権威たちの魔法に対する理解に大きな影響を与えた。それによれば、変身の能力は神にのみ帰属するものであり、魔法による変身は魔女や魔法使いの幻想に過ぎない[23]。

しかし、近世に入ると、先に述べた魔女狩り熱の高まりの中で、変身は幻想ではなく、魔女たちは実際に動物に変身していたとする考え方が主流となった。フランスの法学者ジャン・ボダン（1530－1596）は、そうした考え方の持ち主の1人であった。近代政治学の租である彼は、王室代官のブルダン将軍の話を紹介している。それによれば、将軍はあるとき矢を射て、狼の腿に命中させたが、その数時間後、彼はベッドに横たわる男性の腿にその矢が刺さっているのを発見した[24]。ボダンは、この恐らくは架空の話を、魔法による変身が実際に行われた「確かな証拠」として引き合いに出し、魔女狩りを支持したのである。

こうした認識の変化に伴って、人間から動物への変身は、神の御業による奇跡ではなく、魔女が人々に害を及ぼすために用いる怪しげな魔法の1つであると見なされることになる。12世紀から13世紀の文学作品に登場する狼男は、自らの意思とはなんらかかわりのない変身を、計り知れない神の意志に基づいて、受動的に、しかし必然的に被らなくてはならないという、悲劇的な運命の犠牲者であった[25]。しかし、先に述べた魔法観の変化とともに、狼男も、魔女と同じ怪しげな変身魔法の使い手の1人として認識されることになる。そしてシュトゥーペ・ペーターも、狼男であると同時に「魔法使い」であり、「25年間魔女と淫行した」男であった。

16世紀のヨーロッパは、魔法の時代であると同時に、怪物の時代でもあった。宗教改革者のルターとメランヒトンも怪物について論じている。彼らが1523年に出版した小冊子に登場する2体の怪物のうち、「驢馬教皇」（【図7】）は、1495年にテヴェレ河畔に打ち上げられたという身の毛もよだつ化け物であり、「仔牛坊主」（【図8】）は、1523年にザクセン地方に生まれた畸形の牛である[26]。また、クラナッハとともにドイツ・ルネサンスを代表する画家アルブレヒト・デューラーも、1496年にズントガウ地方に生まれた、2つの胴体と8つの脚をもつ畸形の「ランツァーの雌豚」を銅版画に描いているし、ネーデルラントの画家ヒエロニムス・ボッシュやペーテル・ブリューゲルの作品は、怪しげな怪物たちで溢れかえっている[27]。



【図7】

【図8】

もちろん、16世紀以前のヨーロッパにも、怪物、あるいは怪物の存在を伝える物語や絵画は存在した。さらに、ヨーロッパの教会を訪れれば、その壁のあちこちにファンタスティックな怪物の彫刻を発見することができる[28]。しかし、宗教改革の時代である16世紀の怪物には、それ以前の怪物にはない特徴がある。すなわち、この時期の怪物たちは、将来の不幸を示す凶兆と見なされた[29]。この背景には、宗教改革をきっかけとするカトリック、プロテスタント両陣営の宗教、そして政治的論争の激化があ

る。先の「教皇驢馬」や「坊主仔牛」がそうであったように、怪物たちは両陣営にとって都合の良い意味を付与され、プロパガンダ作戦に利用された。

すでに述べたように、中世における人狼譚において、狼男は必ずしも否定的に描かれていない[30]。しかし、16世紀のヨーロッパでは、彼らは「悪」の象徴としての「怪物」として、不安や恐怖の対象とされてしまう。魔法や怪物は人々の意識の大きな領域を占めていた。それも歓迎すべき現象、神の全能の力を示す畏怖の対象というよりも、忌避すべき魔法を用いる恐ろしい怪物として、人々の不安と恐怖の対象となっていた。

以上の点を踏まえ、16世紀のヨーロッパ、特にドイツにおいて、人々の放浪者に対する警戒心、聖職者に対する反感、さらには魔法と怪物に対する恐怖の増大を指摘することができる。放浪者や聖職者、魔女や魔法使いは狼男のイメージと結びつき、狼男出現の環境を準備していった。ほどなく人々は、すでに絵画の世界をうろつき回っていた狼男の姿を、現実の世界に発見することになる。ベットブルクの狼男事件を真実の出来事と見なし、それに熱狂した人々は、彼らが長らく心に描いていた怪物の姿をペーターに投影することができた。そしてこうした人々は、ドイツのみならず、ヨーロッパのあちこちに存在していたのである。ここに、ドイツの片隅で起こった非現実的な事件に、ヨーロッパ中が注目した理由の一端を認めることができよう。

しかし、以上の議論だけでは、1589年のベットブルクに狼男が出現した理由、正にこの時間と場所において、ペーターが狼男として出現し、人々が彼を狼男として認知するまでに想像力が先鋭化していた理由を説明するには、まだ不十分である。そこで次に、検討の視野をさらに限定して1589年のケルン周辺に注目し、当時の社会状況を検討する。

3.「ケルン戦争」と狼男シュトゥーペ・ペーター

1589年の狼男事件が起こった当時、ベットブルク周辺の地域では、宗教改革以降のカトリック勢力とプロテスタント勢力の対立が激化していた。その頂点としての出来事が、1583年のいわゆる「ケルン戦争」(Kölnischer Krieg) である。

1577年12月5日にケルン大司教となったゲープハルト・トルフゼスは、ルター派への改宗とケルン大司教領内への宗教改革の導入を目論み、彼の顧問官、司教座聖堂参事会 (Domkapitel)、ケルン大司教領の諸身分との間に対立を生じさせた。この対立は、帝国内外のプロテスタント勢力とカトリック勢力を巻き込みながら、戦争へと発展する。ゲープハルトは、1582年11月4日にボンに軍隊を派遣し、12月12日にこの都市を支配下に置くと、12月19日に自らのルター派への改宗を宣言し、大司教領内の臣民に、信仰の選択の自由を認めた[31]。これに対しケルン司教座聖堂参事会は、1583年4月26日に大司教ゲープハルトの廃位を宣言し、5月23日にはエルンスト・フォン・ヴィッテルスバッハを新大司教に選出した[32]。もちろんゲープハルトはこれを承認せず、事態は新旧大司教の軍事衝突に発展する。しかし、大諸侯ヴィッテルスバッハ家出身のエルンストは、軍事力においてゲープハルトを圧倒していた。1584年2月5日に彼の軍勢がボンを占領すると、両者の争いの帰趨は決した[33]。もっとも、この地域のプロテスタント、カトリック両勢力の紛争は、小休止を挟みながら継続し、最終的には1618年の三十年戦争へとなだれ込んでいく。

こうした危機的な状況が人々の精神状態、彼らの想像力に与える影響は大きい。これに加えて、戦争は村落や都市における人々の生活環境を破壊し、避難民を生み出した。さらに戦争行為が終結した際には、当時の軍隊の主力であった傭兵たちは生活の糧を奪われてしまう。こうした大量の避難民や傭兵は、少なくとも差し当たりは放浪者とならざるを得ない。ま

た、宗派紛争は、人々の聖職者に対する反感、特にプロテスタントのカトリック聖職者に対する反感を弱めることなく、むしろ強めたであろう。そして近年の魔女狩り研究によれば、魔女狩りは他のどのような地域よりも、ひとつの国、あるいは国家的まとまりをもった共同体の境界の内部に複数の宗派に属する人々が存在するか、あるいは隣接する複数の国や共同体で互いに異なる宗派が信奉されているような地域、すなわち、まさに狼男出現前夜のベットブルク周辺のような地域において、頻発していた[34]。

このように、ケルン戦争後しばらくの間、ベットブルク周辺では、先に述べた人々の放浪者に対する警戒心、反聖職者主義、そして魔法や怪物に対する恐怖が、相当程度高まっていたと考えられる。それでなくても戦争は、大量の死者と負傷者を出し、村落の秩序を乱して家畜や家禽を散乱させた。この状況が狼に好ましかったことは間違いない。狼はますます大胆になり、軍隊に付きまとい、村落や都市にまで入り込んでくる[35]。逆に、戦争中に人間側は、狼によって家畜や家禽を奪われ、時には彼らの生命を危うくされた。こうして彼らは、狼というただでさえ厄介な存在に対して、常にも増して神経過敏にならざるを得なかったであろう。

以上のような危機的状況の中で、ドイツの片田舎ベットブルクに狼男が出現し、捕縛、処刑された。ヴァインスベルクはこの事件の信憑性に対する疑念を表明した。しかし、当時のベットブルク周辺の状況、特に人々の心理状態に鑑みるならば、当時そこは狼男がいつ出現してもおかしくない状況であったと言うこともできよう。

おわりに

ベットブルクの狼男事件の発生、そしてそれがヨーロッパ中に与えた衝撃の理由を探りながら、宗教改革期における人々の幻想のあり方を考察してきた。16世紀のヨーロッパを特徴づけていた政治的、宗教的、社会的状況を背景として、狼男ペーターは、正に出現すべき時と場所に出現し

た。そして彼の物語は、程度の差こそあれ、同様の状況のもとにあったヨーロッパの多くの地域の人々に衝撃を与え、繰り返し語られたのである。このことは、宗教改革期の人々の想像力が、実社会の危機的な状況と強く結びついていたことを示している。

注

(1) Höhlbaum, Konstantin (bearb.): Das Buch Weinsberg. Kölner Denkwürdigkeiten aus dem 16. Jahrhundert, Bd. 1/2, Leipzig 1886/1887; Lau, Friedrich (bearb.); Bd. 3/4, Bonn 1897/1898; Stein, Josef (bearb.), Bd. 5, Bonn 1926, hier Bd. 4, S. 79-80. [　] 内著者。訳出にあたっては、次の文献も参照した。フランツ・イルジーグラー／アルノルト・ラゾッタ（藤代幸一訳）『中世のアウトサイダーたち』白水社 1992 年 182-183 頁。

(2) *Weinsberg*, Bd. 4, S. 80.

(3) ロッセル・ホープ・ロビンズ（松田和也訳）『悪魔学大全』青土社 2009 年 290 頁。

(4) ロビンズ『悪魔学大全』289-290 頁。

(5) 宗教改革期の木版画ビラ、パンフレットに関する代表的な研究として、以下の文献がある。Scribner, Robert W.: For the Sake of Simple Folk: Popular Propaganda for the German Reformation, Oxford 1981. また日本における研究として、森田安一の先駆的な研究を挙げておく。森田安一『ルターの首引き猫：木版画で読む宗教改革』山川出版社 1993 年。

(6) バートンとスコットの議論については、ロビンズ『悪魔学大全』139 頁を参照。

(7) 池上俊一『狼男伝説』朝日新聞社 1992 年 32-43 頁。

(8) クロード＝カトリーヌ・ラガッシュ／ジル・ラガッシュ（高橋正男訳）『狼と西洋文明』八坂書房 1989 年 13 頁。また、ランクルについては、ロビンズ『悪魔学大全』605-607 頁を参照。

(9) ヨーロッパにおける狼と人間の関係については、クロード＝カトリーヌ・ラガッシュ／ジル・ラガッシュ『狼と西洋文明』1-33 頁を参照。

(10) セイバイン・ベアリング＝グールド（ウェルズ恵子／清水千香子訳）『人狼伝説　変身と人食いの迷信について』人文書院 2009 年。

(11) クロード＝カトリーヌ・ラガッシュ／ジル・ラガッシュ『狼と西洋文明』25-27頁。

(12) 阿部謹也『中世の星の下で』筑摩書房1986年187頁。

(13) 阿部謹也『中世賤民の宇宙　ヨーロッパ原点への旅』筑摩書房2007年221-222頁。

(14) ブラニスワフ・ゲレメク（早坂真理訳）『憐れみと縛り首　ヨーロッパ史のなかの貧民』平凡社1993年。

(15) ハイナー・ベーンケ／ロルフ・ヨハンスマイヤー（永野藤夫訳）『放浪者の書　博打うち　娼婦　ペテン師』平凡社1989年118頁。

(16) フェデリコ・バルバロ訳『聖書』講談社1980年154頁（著者が一部改訳）。クロード＝カトリーヌ・ラガッシュ／ジル・ラガッシュ『狼と西洋文明』13頁も参照。

(17) Scribner: For the Sake of Simple Folk, p. 76.

(18) Scribner: For the Sake of Simple Folk, p. 55-56.

(19) Scribner: For the Sake of Simple Folk, p. 56-57.

(20) 『魔女の鉄槌』については次の文献を参照した。黒崎正剛『図説　魔女狩り』河出書房2010年35-42頁。

(21) 次の文献では、16世紀の魔法の数々が手際よくまとめられ、紹介されている。溝井裕一『ファウスト伝説　悪魔と魔法の西洋文化史』90-157頁。

(22) 溝井『ファウスト伝説』102頁。

(23) 黒崎『図説　魔女狩り』18頁。

(24) グールド『人狼伝説』68頁。

(25) 池上『狼男伝説』44頁。

(26) アヴィ・ヴァールブルク（伊藤博明監訳／富松保文訳）『ルター時代の言葉と図像における異教的＝古代的予言』ありな書房2006年58-62頁；伊藤進『怪物のルネサンス』河出書房1998年25-26頁。

(27) 「ランツァーの雌豚」については、以下の文献を参照。ヴァールブルク『ルター時代の言葉と図像における異教的＝古代的予言』64-68頁；伊藤『怪物のルネサンス』164-165頁。

(28) 伊藤『怪物のルネサンス』7-10頁。

(29) ヴァールブルク『ルター時代の言葉と図像における異教的＝古代的予言』62-69頁；伊藤『怪物のルネサンス』247-262頁。

(30) 池上『狼男伝説』44 頁。

(31) *Weinsberg*, Bd. 3, S. 156-157; Lossen, Max: Der Kölnische *Krieg*, Bd. 1, Gotha 1882; Bd. 2, München/Leipzig 1897, hier Bd. 2, S. 60-103, 166.

(32) Lossen: *Krieg*, Bd. 2, S. 278, 295-296.; Janssen, Wilhelm: Kleine rheinische Geschichte, Düsseldorf 1997, S. 188.

(33) *Weinsberg*, Bd. 3, S. 227-228; Lossen: *Krieg*, Bd. 2, S. 471-472.

(34) 黒崎『図説　魔女狩り』52 頁。

(35) クロード＝カトリーヌ・ラガッシュ／ジル・ラガッシュ『狼と西洋文明』43-44 頁。

図版出典一覧

図 1：Harms, Wolfgang/Kemp, Cornelia: Deutsche illustrierte Flugblatter des 16. und 17. Jahrhunderts. Bd. IV, Tubingen 1987, S. 412.

図 2：国立西洋美術館（編）『ゴータ市美術館所蔵作品による宗教改革時代のドイツ木版画』1995 年 30 頁。

図 3：ベーンケ／ヨハンスマイヤー編『放浪者の書』167 頁。

図 4：Scribner: For the Sake of Simple Folk, p. 76.

図 5：Scribner: For the Sake of Simple Folk, p. 56.

図 6：Scribner: For the Sake of Simple Folk, p. 57.

図 7：ヴァールブルク『ルター時代の言葉と図像における異教的＝古代的予言』61 頁。

図 8：ヴァールブルク『ルター時代の言葉と図像における異教的＝古代的予言』61 頁。

A Werewolf in Bedbourg: Imagination and society in the 16th-century Europa.

TAKATSU Hideyuki

On 31 October 1589, Stupe Peter was executed for his horrible crimes at Bedbourg, a small town on an affluent of the Rhine. Soon after his execution, a pamphlet telling about his crimes and execution went through many editions and Peter became one of the most famous of all werewolves. This article deals with the problem of how one peasant was possessed by the terrible images of werewolves in the 16th-century Rhineland and caused a sensation around Europe, from the viewpoint of the history of image and society in the early-modern period. In conclusion it is pointed out that imagination is strongly influenced by social conditions.

In the 16th century, many kinds of people—particularly vagabonds, corrupted clergy, and monks—were described as wolves in pamphlets and other visual materials. So it can be said that many werewolves had already appeared, if not in fact at least in print, before Peter was discovered. Moreover, in this century witches, who were said to transform themselves into wolves with magical power, were charged in earnest and appearances of monsters were reported as social conditions became destabilized due to discord between Protestants and Catholics after the Reformation.

The situation was extremely tense in the Rhineland immediately following the "Kölner Krieg" war. Inhabitants who had lost their houses and hired soldiers, so-called "Landsknecht", who had lost their jobs after the war, became vagabonds. Protestants stirred up the people to feel hostility toward the clergy. Recent studies show that witch-hunts occurred frequently in the tense border areas of religion, such as the 1580s Rhineland. After all, such an intense situation could lead Peter to behave as and to be charged as a werewolf.